

# Signal 「私が消えていく…」

街で出会い、私が声をかけるのは、  
自分の表現方法を持っている外見が派手で個性的な人が多い。

でも、いつの頃からか、気づいてしまった。

見せたくても「自分」を見せられない人がいることを。

「家でも学校でも友達の前でもいい子の顔して、  
仮面を被ってるんだよね。  
表の顔、裏の顔って使い分けていて、社会に適応しちゃう。  
気がついたら、自分っていうものがどこにもなくなっちゃった。  
私みたいな子どもどこにでもいるよ。  
街の中に、はみ出してる子だけじゃないよ。  
みんなと一緒にいなきゃと思って、  
輪の中で、苦しんでる子だっているよ。」

見つけて。  
私はここにいるよ。

気づいて。  
私に。

私みたいな子  
どこにでもいるから…」

「私は援助交際ではなく、タダでやります。

自分でもやめたい気持ちはあります。

でも自分を否定することになるんです。

だから肯定的に受け入れて、

淋しくなったときに一緒にいてくれる

人を探したりします。

本当に本当に「ギュー」ってされると

うれしんですよ。

「ちゅう」してくれたり、

一瞬でも自分のことを考えてくれるだけで

幸せです。

誰とでもやれるんです。

愛なんて、忘れちゃいました」

—ひかり

「自分が存在しているのかさえ  
危うく感じる」

—まな

「カラダだけでも必要としてくれるなら、

それでもいいかな。

とにかく空っぽの自分を満たしたい」

—りの

「自分がいないっていうか、

自分がいないんだ。

それって死に等しいよね」

—なぎさ

「私って何もないから、

自分の中であるものっていったら、

お金とカラダぐらいかなって」

—のぞみ

「友達、親、

周りから見られて、自分ができてる。

こういう子じゃなきゃいけないっていうのが、

いつも自分の中にある」

—さとり

「前兆なく親が怒鳴り込んできた。

ついでに蹴られた。

意味わからない。

怖くなってブランケットを頭から被った。

酸素が薄くなった。

少し泣いた。

そんなことをいちいち

怒鳴らずにいられないのか。

自分にも色々、悩みがあるんだよ。

なんか不安定だ。

泣けてくる。

殺、したい。

テレビうるさい。つけるな苛々。

外部からの情報なんかいららない。

誰かに会いたい。

姿が見えない。

怖くなって恐い。

寂しいし、悲しいし、死にたい。

理解されない。

自分がわからない」

—るあ

「生きててすいません」

この世の中に存在しない方が

よかったのかなって」

—えみ

「家族はいるし、家はあるけど、

部屋にずっと一人で引きこもっていて、

自分で自分の声を聞いていない日もある。

自分は存在してなくてもいいんだよな、って

思ってしまう」

—ちあき

「もし私が20人以上と、日してるっていったら、  
びっくりする??」

「こんな話、みんなびっくりするけど…

『じゃやらせて』って、寄ってくる男もいるの。

私は生徒会長やってて、

5年付き合ってる彼氏いて一途で

「いい子」

「いつも笑っている」

「ニコニコしてる」って、人はいう。

でも私の「ウラ」は誰もわからない。

見かけと中身って違うんだよ」

—あい

「とてもとても甘やかされた

環境で育ってて

なのにこんなにも生きづらい。

怒られたくない。

それはっかり考えて、

自分という人格がどんどん

なくなっていく」

—庵

「空気になりたい

見えなくなりたい

うすくなっ

いなくなりたい

溶けてみたい

雪みたいね」

—せいな